

# 私の研究の勘所

— 自分にとっての「ノーベル賞」受賞のために —

---

東京電機大学  
佐々木良一



# 研究の勘所(その1)



(1) 新しいことをやろう。他人と同じこと、似たことをやっているのは研究ではない。

(2) 研究にはニーズ指向型研究とシーズ指向型研究があり、目標設定もアプローチも異なることを知らなければならない。

(3) 今あるニーズに対応するだけがニーズ指向ではない。3年後5年後の世の中を想定し、そこに必要な製品やサービスを実現するための技術開発や試作が本当のニーズ指向の研究である。

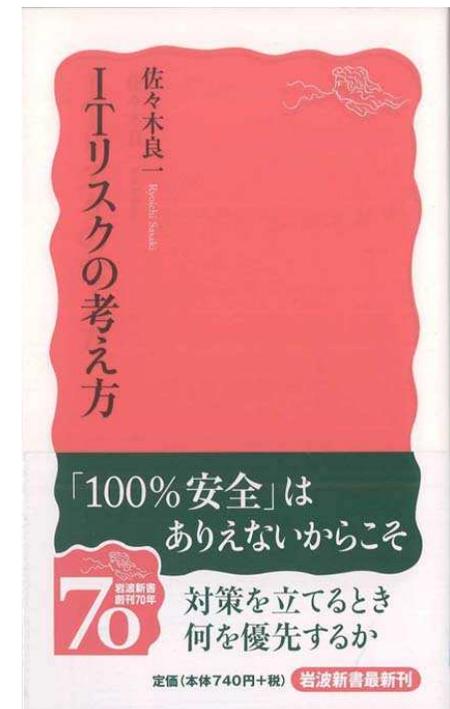
(4) 新しいニーズを先取りすることにより、新しいアプローチが生まれる。早ければ何をやっても新しい。この段階での新しさはどんどん特許にすれば新しさが保存される。

## 研究の勘所(その2)

(5) 世の中の要求は時代とともに変わりうる。評価指標を変えてシステムの検討をしてみよう。たとえば、sustainable志向のように。評価指標が異なると新しいアプローチが生まれ、新しいシステムが生まれる。

(6) 世の中は動き出すと技術者の予想以上に進む。1つの指標を極端にまで深め、広げてあるべきシステムを考えてみよう。

(7) 役に立たない本を読め。役に立たない情報の集積がいつか、他人が思い付かないアプローチを生む。



# 研究の勘所(その3)



(8) 良い研究には良い情報が不可欠である。良い情報は良い情報を発信しないと入ってこない。

(9) 自分が独創的だと思っても筋の良いアプローチだと似たような発想は必ず見つかる。そこからが本当の勝負である。

(10) 部分的な個々のちょっと良いアプローチの集積が長い間にトータルとして独創的研究につながる場合もある。長くやれるようにすることも独創的な研究に不可欠である。継続は力である。

(11) 良い研究をやる秘訣は畢竟「早くやること、長くやること」である。

# 研究の勘所(その4)

---



(12)ライバルとのつばぜり合いに勝てるかどうかは何日眠れない夜をすごしたかに依存する。ちなみに、眠らない夜ではない。

(13) すべての研究者は、ハッピーでなければならない。ハッピーでない研究者というのは形容矛盾である。

(14) 自分を大切にしよう。自分を大切にできない研究者は他人も大切にできない。

(15) もっと飢餓感をもて。もっと自負心をもて。最後の粘りはこれらのコンプレックスがささえてくれる。

